

## 中川さんの14年

曾我祐典

中川努は、本当に大きな存在だった。フランス文学科におけるほぼ14年間の仕事ぶりだけでも詳しく述べようとすれば、どれだけページを費やしても足りないだろう。

新進気鋭の外国語教育学研究者であった中川さんが学科のスタッフに加わったのは、1981年4月のことだった。どの大学でも学部教育の最初の2年間は一般教養にあてていた時代で、われわれの学科も、1・2年次の教育内容は専門性の点で十分なものではなかった。中川さんは、学生が文学・言語学研究に3年次から取り組めるだけの能力を身につけるよう、とくにフランス語を効率的に学習するカリキュラムを実現しようと意欲を燃やした。

そのために彼が提唱した教授法は、実際にフランス語でコミュニケーションをしながら総合的能力を養成していくという、それまで日本ではほとんど知られていない斬新なものだった。授業の改良と並行して、彼は学生の自主学習を促進・支援するために、フランスの学生との交流、フランス語サークルの活性化、フランス映画の上映、大勢のフランス人と週末をともに過ごす「フランス語合宿」の開催など、さまざまな方策を講じた。また、コンピュータを用いる自習教材も制作した。日本でその時期にフランス語CAI開発研究を行っていた教員は、ほかにいないだろう。彼のこの路線は、やがて、学生たちがパソコン通信を利用してフランス・イタリアの学生たちと物語を合作するという画期的な試みにもつながっていく。

中川さんは、どんな場合でも話し合いを重んじ、ことばによって事態を開示しようとする人だった。ことばの力を信頼するこの姿勢が、彼の外国語教育に対する取り組みの背景にあったにちがいない。彼は、学科の枠を大きく越えて、全国の大学のために新しいフランス語教育をさまざまな形で推進していった。早くも1983年には、中井珠子さんらとともに、日本の教育条件に合った教授法の開発と教材制作をめざす本格的な研究に着手した。その直接の成果が『フランス語 '86』にはじまる教科書のシリーズであり、延長線上に位置づけられるのが『コレクション・フランス語』や『モザイク』である。彼のグループはしばらく先駆者の孤独を味わったが、現在では中川方式が多くの大学で主流になりつつある。

中川さんの専攻領域には、外国語教育学の他に、言語学・フランス語学と教育工学が含まれる。東京外大で田島宏先生の学生だったころから世界の言語研究の流れによく通じていた彼は、C. Fuchs らの著書の価値をいち早く見抜き、その日本語訳『現代言語学の諸問題』の出版のために尽力した。彼の言語学者としての研究テーマはフランス語における語の派生メカニズムで、とくに接尾辞による派生に注目して、意味と形態の関係についてコンピュータを駆使して独創的な研究を行っていた。1988年にパリ第7大学にDEA論文を提出した後、コレージュ・ドゥ・フランスの C. Hagège 教授の助言を得て博士論文作成の段階に進んでいた。外国語教育と言語学におけるコンピュータの利用法の研究には80年代前半から取り組んでいたが、最近では情報処理教育も考察対象に含めて、研究成果を教育工学の学会で報告していた。

中川さんは、マルチメディア教材の開発研究など、ますます先端的な仕事にとりかかっていた。たくさんの構想と夢をもって、大きな飛躍をとげようとしていた。

つねに広い視野と長期的な展望でものごとをとらえて行動していた中川さんは、フランス文学科が時代の多様な要請によりよく応えていけるように献身的

に働いた（92年度と94年度は学科主任を務めた）。たとえば、学科はいくつかの最新機器を誇ることができるが、それも共同研究室のデザイン・整備の多くを担ってくれた彼の先見性のおかげである。

彼はまた、文学部の教育・研究体制を充実させるためにも大いに貢献した。近年はとくにカリキュラム改革や情報処理教育に力を注いでいた。94年度だけでも、予算委員、カリキュラム委員、外国語教育科目運営委員、情報処理科目運営委員、情報ネットワークシステム運営委員、パソコン教室運営委員、入試実行小委員、文学部自己評価委員などの職務を担当していた。

中川さんは、初級・中級のフランス語教育から、フランス語学の講義や卒業論文の指導、さらには大学院のフランス語学・外国語教育学の指導にいたるまで多岐にわたる授業を担当し、すべてにおいて優れた教授能力を発揮した。彼は、学生との触れ合いを何よりも大切にしている、どんなに研究や役職で忙しくても学生のためには時間を惜しまず、よく話を聞いて適切な助言を与えていた。知的にも人間的にもいかに素晴らしい教師であったかは、『学生・教職員追悼文集 風に想う』（関西学院大学、1995）に最初と最後のゼミ生が寄せた二つの文章からもうかがえる。

実際、中川さんほど学生に深く信頼され、慕われた人はいないだろう。学生は、あの笑顔と声に接して、この人なら何でも分かってもらえると安心して心をひらき、のびのびと振舞うことができたのだ。学生だけではない。いかに多くの人が彼に支えられていたことか。本当に、だれに対しても寛容で優しく、だれに対しても惜しみなく与える人だった。

フランス文学科が14年にわたって中川さんからどれだけ豊かな恩恵を受けたか、とうてい書ききれるものではない。

私などは中川努のいない世界に残されて、うちひしがれたまま、若い人たちが彼から受け取ったものをよく活かしてそれぞれ充実した人生を送ってくれることを願うばかりである。

（文学部教授）